新山協ニュース

第4・5号合併号　新潟県山岳協会　発行者　鈴木　敏雄

明星山の遭難に想う

小野　健

山は遭難が多くなるほどに有名になり、入山者を増して悪循環を繰返していないだろうか。

それがより困難なルートへ立向う純粋なパイオニヤワークの発露であるとしたら、同じ失敗を繰返さないための周到な研鑽と努力が成されて然るべきであろう。他人が行くから俺もゆく。遭難なんて他人事で運が悪かったのだから、自分には関係ないさ。こんな安易な気持で行動していたら、また同じ二の舞を踏む確率が大きくなろう。

安全登山を実現するには先ずその登る山をよく知り、そこで失敗した事例を充分研究することである。山は必ず自然の創造物としての個性を持つている。

明星山、それは谷川や滝谷辺りとは全く異質の山であつて、単なるグレードの基準で評価したら大変危険である。

この山は古生代の石炭紀～二畳紀にかけて、今から三億～二、五億年の昔に海底に堆積してできた良質な石灰岩より成つている。その後、造山運動により褶曲断層を繰返しながら陸化し、更に長年月にわたり雨や風雪により侵蝕を受けて現在の姿になつた。石灰石は炭酸ガスを含んだ水に僅かに溶解するので、その岩肌がトゲトゲになり素手ではホ

越後三山水無渓谷

ールドできないところもある。

一見ホールド、スタンスに好適に思えても信頼性が乏しく、また体を移動する時衣服に引掛かるのでバランスを失うことがある。また、シリツケンサイドと呼ばれる平滑な断層滑り面もある。地層がかなり褶曲してもめているので、大小様々のジョイント・クラックの発達した破砕帯があり、その間にはコンパクトな岩壁が現れたりして変化に富んでいる。石灰石はモース硬度が3〜4で火成岩系に比べると珪酸分が少ないので、軟らかく靱性が低い。従ってボルトもハーケンも深目に打込んで効き目を充分チェックしないと欠損する恐れもある。

急傾斜部にはスラブが多いが、少し傾斜が緩くなると伯山のため植物が付き、浮石が多くなつてくるので、それらの変化適応した慎重な判断が必要となる。

これを他山の岩場と詳細に比較する紙面はないが、要は明星山の岩場が隣の黒姫山を含め、他の有名な岩場とは相当異質のものであることを認識して欲しい。そのためには先ず東壁ルンゼや墓石稜等比較的容易なルートより、この山に慣れて、よくその特徴をつかみ、より困難なルートに向つて一歩ずつアプローチすべきである。

所詮登山は自分自身と仲間とのチームワークであり、楽しみなのである。だからその楽しみの代償を他人の迷惑にまで発展させてはならない。誰れも好んで事故をおこすわけではないが、例えば明星の南壁で宙づりになつたら、その救助は容易なことではない。

第一のアクシデント対策を考慮すれば、徒らに背伸びをすることはできないであろう。

しかし、明星の東南西壁にも黒姫南壁、マイコミ平の洞穴群にも魅力ある石灰岩特有の造形が無数に残されている。

この山壁も周到な計画と慎重な行動によつて臨むならば、若人のパイオニヤワークの対象として恰好な場所であることも確かである。

朴差岳での遭難事故収容活動

関川村山の会　平田　大六

今夏、飯豊連峰朴差岳（一六三六）で死亡事故が発生しこの収容活動に県警のヘリコプター（以下ヘリと略す）が出動し、本会がこれに協力した。概要を報告するので参考にされたい。

事故をおこしたのは、東京都の高校生で、先生、OBを含む十数名のパーテーであり、一人が疲労のため死亡した。

パーテーは、七月二十五日関川村大石部落で幕営し、二十六日早朝全山縦走のため朴差岳にむけ行動を開始した。前日につゞいて暑い日であつた。権内尾根に登つてから、一人が疲労で倒れたが、回復したので行動は続行された。前朴差岳（一五六〇）をすぎ長者平（一五八〇）へむかう鞍部付近で再び倒れ、意識不明、脈膊停止、心臓停止の過程をたどり夕刻その場所で死亡した。それまで心臓マッサージや人工呼吸をしたことは言うまでもない。

二十七日早朝連絡のため二名が大石へむけ下山し、後一名を現場に残して、本隊も全員下山行動をとつた。

大石では、当事者、関川村役場、警察署、本会の四者で遺体収容作業のための現地本部がもうけられた。

付近の長者平は草原であるのでここへヘリを着陸させる。五人乗りのヘリに収容隊三名（本会会員）を乗せ、現場に残つている一名と合流し、遺体を短時間の間に長者平までひきあげヘリに積み込むという作戦をとつた。

あいにくその日は、現場付近は千四百m以上はガスにおおわれ、二回のヘリの飛行は、ガスの境界面を突き進むことができず、ひきかえしてしまうという事態となり、ヘリは新潟の本部へ帰還した。無理にガスのなかにつつこむと乱気流のため霧もみ状態になり、墜落するのだという。

その日の活動は、これで終へ、二十八日は、同様な気象状況も考へ、人力引きおろしの最悪の事態を考慮した。地上隊十二名（内当事者二名、他は本会会員）を大石四時出発とし、十一時に頂上直下長者平まで遺体をあげ、ヘリの来るのを待つという計画を決定した。ヘリの塔乗パイロットは、現地に詳しい高橋千代吉本会副会長をあてた。

やはり、二十八日も、前日と同様な気象状態であつたが、行動は計画通りすゝみ、地上隊はまづ、十時に二夜を経過した遺体現場に到着した。常法どおりシュラフザックに収納し、外側を厚いゴムのベルトコンベアで巻いた。これだとそりのようになり、不整地通過でのショックもなく、遺体を損傷をせず長者平にひきあげることができた。

現地は、風速五mほどでガ

ス、視界は五十m位である。やがてヘリの爆音が聞えてきたが、間もなく消失し、すぐにヘリポート（荒川左岸下関付近の河川敷）から、視界不良着陸不能の連絡が無線でおくられてきた。

いよいよ人力搬出という体制をかためつつあったとき、再度着陸を試みるためヘリポートを離陸した旨連絡が入った。視界風速は相かわらず悪いまゝである。収容隊を長者平の草原いっぱいに円形に分散させ、ヘリの発見監視誘導にあてた。

接近した爆音は、西から北、そして東に徐々にまわり、ヘリがガスの突破口の発見に苦渋している様子が想像できた。やがて東大熊沢（長者平沢）あたりの源頭の草付すれすれを超低空で接近してくるヘリを発見した。現地へ誘導着陸させ、すばやく遺体の積み込みは終えたが、視界不良で離陸の決心がつかない。山形県側のガスが一瞬晴れ、この間げきをついて、ヘリは一気に離陸し、東俣沢深く下降し去った。

遺体と入れ替りに残った高橋千代吉パイロットの話によれば、ヘリは大石川をさかのぼり、雨雲の前面を逃げるように大熊沢をつきあげた。しかしガスのため権内尾根を越えて東大熊沢に転戦、ここから源頭の草付をなめながら、ガスをかいくぐって現場に到着したのだという。機長もパイロットも決死の行動であったことがわかった。

これで、作業は終えたのであるが、二、三気づいた点を述べてみたい。

①疲労死＝近年この時期に朴差岳で四件あった。原因としては、梅雨明け直後で体が暑さに馴れていない。他の山岳がますます入山便利になっている今日、飯豊のアプローチは相対的にきつくなっている。死亡者が大学や高校初年生に多く、過去の受験勉強の「疲労（トレーニング不足も含む）」がとれていない。用具の研究不足と都会生活を安易に山へ持ちこむことからくる重荷。など考えられよう。

②ヘリの行動限界＝昨秋県山協の冬山技術向上研究会で問題になったのは、ヘリの着陸地点の地形であった。ヘリは万能でなく谷底へ舞い降りるなど論外であるということが指摘された。今回は、更に気象条件という新しい弱点が認識された。この作業の当初、私たちはガスがあれば、晴れている上空高く飛び、上から垂直に降れるものと思いこんでいた。しかしヘリはわずかの乱気流でも危険な状態にさらされ、気流の強い上空では不可能という機長の説明であった。またヘリのような簡単な機械は、有視界飛行の航法にかぎられ、百や二百mの視界ではどうにもならないということだった。

実際に、このたび、荒川と大石川の出合上空で小さなエアポケットに入ったときの衝撃は、乗っていた私たちの顔色をなくさせた。

× ×

以上概略を報告したが、特にヘリコプターの機能の限界について、再認識した収容活動であった。

越後の旦那様㊥

藤島 玄

夏は日本海の影響を受けて雷雨が多く山が荒れる。残雪が崩れるから油断ができない。

沢は虻が夥いし、山又山で平原は見えぬが深山の興趣を感ずる山である。

太古伊佐須美神社がこの山の絶頂にあって、四道将軍大彦命が祖神伊弉諾尊、伊弉冊尊を斎き祀ったと伝えられ、大彦命と御子武弉名川別命をも合祀した。後世この御神楽岳から大沼郡明神岳に移し、さらに赤館荘高田に移祀したもので、正一位伊佐須美大明神と称し、奥州二ノ宮、会津六社の一で会津一ノ宮で、現在は国幣中社である。云々。

古川氏は追加して曰く。御神楽岳の明神は越後角田山に奉斎したものが山麓に下り、寛治年間の大海嘯に宮山は流され、その後御神楽岳へ移祀されたと。越後の神仏が会津へ来ていなさる。柳津町の南端、博士山の山麓の久保田の各村落ごとに弥彦神神が約二十社くらいある。これは山鳥が越後の弥彦の幣束をくわえて飛んできたというから、弥彦の祭神が会津へもお出なさった証拠である。飯豊山神社も方々にある。飯豊山は指定村社だが郷社に昇格したものだ

早戸から沼沢へ出る途中に米山薬師もある。

今朝は栗飯をいただいて、住職島村泰順師の案内で自動車を駆って川口から横田に入り、禅宗伝灯山松前寺を再訪した。住職島田実岳師も同乗し、只見川を渡って大塩温泉岩崎屋に着く。昼食後島村師は帰山され、代って旅館の亭主三瓶隆治師の案内で塩沢の

塩光山医王寺へ車を走らせた。

真言宗智積院末寺だったが、現在の前記隆治師が長く無住の荒寺であったのを禅宗にして再興したものだ。塩沢橋の袂に道標がある。「右作場道旧製塩場を経て馬尾滝に至る。左只見山口を経て田島へ至る。」と。右の坂を登り塩沢川に沿って行くと左側に医王寺があり、長岡藩総督蒼龍窟河井継之助秋義の墓は、本堂右脇の墓地にある。「七年前に来たとき、河井継之助先生の墓と書いた札がありましたのですがねえ。」と中原さんが無銘の無縁塚の辺りを探ねたがそれらしいものもない。三段の土饅頭の上の二尺くらいの台石に、一尺くらいの正方形の中が虚ろな火袋石に屋根石が上っているのみである。左に楓、右に椿と桜、いずれも植えて四〜五年の若木である。楓と椿は住職の手向け。桜は門前の並木と一緒に先年中原さんが、わざわざ越後赤塚から贈った手向けの一本である。

吾今日刎以表赤心　請附首級以金三万献之

吾藩或免矣

天下を洞察して国を想い、藩を憂い、吾首を刎ねて官軍の疑惑を解き、我藩の汚名を雪がんと叫んだその首はこの石祠の下に眠るか。

案内して来た旅館の亭主、いつの間にやら錦の法衣に金襴の袈裟をかけた住職に早変りして。須弥壇前の曲録に倚り拂子をふって悪障怨を払いつつ、音頭朗々と看経の様は天晴れ大和尚である。師匠の松前寺様は下座に木魚を叩いて番僧役を勤めるもゆかしい。

「さあ、お茶を一つ」勤行が済むと袈裟をかなぐり捨てて中原さんと松前寺様を正座に据えて、庫裡の茶釜を焚いて茶坊主に早変りしている。

御堂前で記念撮影して下向の道に桜がある。「こんなになりました。先年寄進して貰った桜はこの辺では珍らしい。寺だけ欲張っておられんので、学校や神社へも分けてやりましたよ。大雪には大分やられまして。」とお礼を云いながら語っていた。

戻って村中の道を行くと、右手の石垣の上に土蔵と萱葺屋根が見える。六間半の母屋に、三間半の三間の中門が曲手にあり、「矢沢伊織」の名札があり、河井継之助終焉の家である。代々漢方医で、先々代の宗益のときが、河井継之助が戸板に乗せられ、赤毛布をかぶせられて八十里越をかずかれてきて、此家の前の桑畑に下ろされたのを手当をして、家へ運んで施薬治療したがすでに創口が化膿し毒が全身に廻って非常に苦しんだ。

奥の六畳間で八月十三日から四日間苦しみつづけ、死の前夜の十五日に従僕松蔵を枕辺に呼び寄せ死後の用意を命じた。松蔵は驚いたが主人の厳命だので涙を落しながら、主人の目前で白木の棺や納骨箱など、夜を徹して作り、翌十六日野辺の送り仕度は悉く整った。これを聞いて莞爾と笑み、関世四十二、長岡の麒麟児蒼龍窟は限るが如く往生とげた。

日本山岳会越後支部
創立三十周年
山行によせて

佐藤一栄

「かねて志を同じくする越後の岳人が、郷土の山の先達者の温容に接見し、その不撓不屈の登高心を偲びながら……苗場山頂において支部創立三十周年記念行事をとり行なうことと相成りました」と案内状でアピールした日本山岳会越後支部の記念総会が、六月十九日、上越線湯沢温泉の旅館富士屋で開催された。

出席者は本部来賓や神戸の津田支部長さんはじめ関東関西など県外の参加者を含めて、一〇六名となり、支部としては近来まれな大集会となった。

席上で支部創立当時からの会員十八名が功労表彰を受けたり、還暦を迎えた五名の会員を祝福するといったアトラクションも織りこんで、例の如く底抜けの酒攻めとなったが、翌二十日の苗場登山や北越雪譜史跡めぐりには、全員が二日酔いの気配も見せず、晴ばれとした顔付きで参加したのには、流石と感心させられた。

苗場山は思い出深い山だ。戦時中の鈍行で真夜中の越後湯沢駅に着き、ライトを頼りに芝原峠を越えたり、雨に降りこめられた山頂の遊仙閣（山小屋）で、忍びこんできた剽軽なオコジョと二人ぼっちで遊んだ記憶が懐しい。国体選手の合宿や集中登山などでも幾つかのコースを歩いたが、四合目の祓川まで車が登る便利さに、改めて感慨を覚えた。当日はよく晴れて遠い山波を指呼する人々の声も明るかった。十数年前に日本山岳会副会長時代の松方さんなどと登った小松原道の、針葉樹林帯や、湿原の池塘群は当時と変らぬ爽やかな美しさを繰り広げ、津南山岳会の竹の子汁の接待に心なごんだ記念山行だった。

ところで総会の挨拶にもあったが「越後支部は何もしな

い支部だ」と藤島支部長は常々言っておられる。そのとりかも知れない。創立三十周年を迎えたいま、支部の歩みを顧みると、年に一回の総会は当然として、年間の行事計画は立てず、海外遠征はやらず、機関誌「越後山岳」も第六号を発行してから十年の空白がある。本部の年次晩餐会を真似た師走の「玄山会」がこの三年ほど続いたくらいのもので、確かに何もしないに等しい。それにも拘らず今年の五月現在で会員数二二九名と、日本山岳会の県単位の支部としては最高の人数を維持しているのは一見不思議な現象だが、戦後の本県登山界に筋金を入れ、若い山男たちの育成と越後の山の開拓に奔走した藤島支部長の、強烈な意志と半世紀に亘る精力的な活動が実を結んだもので、成るべくしてなった組織だと言える。それと、村松の笠原さんや新発田の佐久間さんといった先輩の方々が、支部長と手を取り合って支部の発展に尽されたご苦労を、忘れてはならないと思う。

「クラブであり大人の集りだから何もしない」という支部が手がけた仕事としては、わが国登山界の元老高頭仁兵衛翁と藤島支部長の寿像を、弥彦山と飯豊連峰の朴差岳にそれぞれ建設したこと。それに第十九回新潟国体登山と支部創立二十周年記念の〝新潟県境全縦走踏査登山〟が印象に残る。国体登山は県山岳協会の主管だが、事実上のチーフとして飯豊連峰への会場誘致からコース選定、役員編成まで、大会運営を緻密に演出した支部長の努力と、支部会員の殆どが役員として参加した実績からみて、越後支部あっての国体成功といっても過言ではなかろう。そして何よりの成果は、国体登山を契機として本県登山界に、さらに固い結束が生まれ、進むべき道が定まったことではあるまいか。県境縦走もその実証だといえよう。五つの国立公園を結ぶ六八七粁の県境山岳縦走踏査に参加した四六団体。二一七日間に及ぶ延べ一八八〇名の隊員の行動は、越後支部の全力投球であると同時に、越後の山仲間の友情と団結の勝利だった。

「何もしない支部」の代り

に県山岳協会の着実な歩みがある。支部会員がそれぞれ所属している地域団体で活動し「新山協」を盛り上げてきたことで、越後支部の存在意義は不動のものになった。

昭和50年度実施 二種指導員 地区指導員 決定

昨年、七月以来数回に亘り実施した指導員検定も秋には県山協理事会の承認を得て、日山協指導委員会に申請いたしましたが、審査基準がむづかしくこのほどようやく認定申請書を提出、近日中に決定の運びとなりました。

審査員をお引受けくだされた協会役員の皆さんに本号より厚く御礼申しあげます。

二種指導員

坂井　厚　新潟峡彩山岳会
平田　大六　関川村山の会
五十嵐　力　中条山の会
桑原　悌治　津南山岳会
山田　努　越稜山岳会
内藤新一郎　越稜山岳会
小林　重弘　豊栄山岳会
小関　恒雄　新大山の会
五十嵐　正　直江津山岳会
山田　一男　分水山岳会
松岡　東二　十日町山路野会
清水　迪夫　津南山岳会
以上　十二名

地区指導員

込山　孝　新潟峡彩山岳会
渡辺　芳夫　〃
細井　孝雄　〃
川崎　博　越稜山岳会
高橋　正樹　〃
富山　昇　越後ハイク
近　文蔵　〃
桐原　敏男　豊栄山岳会
尾崎　邦雄　新大山の会
松本　勇一　直江津山岳会
笹本留美子　〃
西村　道博　柿崎山岳会
多田　幸義　栃尾山岳会
浅野　亘寛　〃
杉本　敏　長岡ハイク
片桐　一夫　〃
砂山　久夫
水野　正則　十日町山路野会
中沢　武彦　津南山岳会
以上　十九名

公認指導員検定基準

○岩登り技術　一〇〇点
指導法五〇点　実技五〇点
○氷雪技術　一〇〇点
指導法五〇点　実技五〇点
○学　科　一〇〇点
合格点　三科目合計点が二〇〇点以上で一科目六〇点未満の科目があると不合格。

○項目別評価について

(1)各大項目別に一〇〇点を配点した。
指導法五〇点　実技五〇点
(2)各小項目は重要度の高いものを高配点した。
(3)評価は各小項目毎に減点法にて行なう。
(4)各小項目の得点合計に各

大項目の比率を掛け、科目得点とする。

(5)各大項目の配点

岩登り技術

(1)ザイルの結び方　一〇点

(2)隔時登　四〇点

(3)岩登り制動確保　三〇点

(4)懸垂下降　二〇点

氷雪技術

(1)アイゼン・ピッケル　一〇点

(2)アイゼン無しの雪上歩行　二〇点

(3)急斜面の雪上歩行　二〇点

(4)隔時登攀　二五点

(5)連続登攀　一〇点

(6)滑落停止　一〇点

(7)ワカン技術　五点

小項目、特定小項目については、指導員研修会で説明します。

小項目の配点×$\frac{1}{100}$＝実質得点

国体山岳部門が天皇、皇后杯得点種目への移行、山岳競技となり、競技の厳正をきすために審判員制度規程により、公認審判員制度も確立されました。国体の審判員の認定制度も、日山協の指導員制度を土台にしてありますので、次回の研修会には前記の公認指導員検定基準をもつと詳細に説明いたしたいと思います。指導員の皆さんからは自会の指導員資格取得希望者に周知徹底を計つて下さい。

行事予告

親睦登山　刈羽黒姫山　柏崎山岳会

恒例の県山協秋の親睦登山を今回、刈羽黒姫山に於いて実施されます。標高は八八九・五と低いが米山、八石山と並び柏崎、刈羽郡地方の人々に親しまれている山であります。残雪の春スキー、早春のうど、ぜんまい、わらび等の山菜の宝庫でもあり、又我々のホームグランドの一つでもあります。

山麓の一つ岡野町には名勝「貞観園」があり、その重厚なるたたづまいを訪れるのもよいだろう。又もう一つの山麓黒姫地区の女谷には約四六〇年前から伝承されたと云う古雅な歌舞「綾子舞」が有りわが国古歌舞伎踊り源流の面影を残すものとして注目をあつめております。

この機会にぜひ県内の山仲間がこの山につどい親交を持ちたいと願っておりますので多数の御参加をお願い致します。

日時　十月二日～三日

集合　十月二日　PM六・三〇　高柳町町民総合センター。PM七・〇〇

懇親会。

会費　一、七〇〇円

昭和51年度新潟県冬山登山技術向上研究会

新潟県教育委員会、新潟県山岳協会主催の表記研究会の日程、会場が決まりました。

近く実施要項が配布されるので多数の参加をお待ちします。

期日　十一月十三日～十四日（土・日）

会場　北蒲原郡黒川村　下越スポーツハウス

国体山岳競技について

登山を競技化することの是非については、かなりいろいろと論議もあり、今だに疑問をもつ人も少くない。しかし、長い実績をもつ国体登山が今後も継続していくならば、いつまでも、登山だけが公開種目で国体内にとどまって、いるわけにはゆかなくなつた。

文部省や日体協の国体に関する新構想によつても、競技化せざるを得なくなつている。

日山協も、このような諸般の事情から、今後も国体に参加することを前提に、第二十六回和歌山における山岳部門から山岳競技へ名称変更。（昭和三十九年、第十九回新潟国体は、すでに山岳競技という名称を使つた。）

第二十七回鹿児島国体での天皇、皇后杯得点種目への移行推進の決議以来、競技化の必須条件である競技に関する諸規程を起案・検討し、数回の国体委員総会の議を経てその大筋について合意を得たのである。実施までにはまだ幾つかの問題が残されているが、競技化にふみきり、経験を積み重ねる過程で問題を解決し、立派な山岳競技ルールを作りあげていくことになつた。

概要を記してみると、先づ山岳競技会を計画、準備実施・審査、評価の流れに沿つて考え、それぞれに必要な事項を規定してある。

一、国民体育大会山岳競技開催基準要綱及びその細則について。

主に組織・運営についての基準で、国体全般に関するも

のは日体協で規定しているが、山岳に関するものはなく、従来は日体協の要項を準用してその都度開催県と日山協とで協議して決めていたが、その殆んどは慣習や前開催県協会岳連が推進していた。これを従来の実績に基づいて成文化したもので、主として開催県の計画準備及び組織運営をより円滑にしようとするものである。主な内容は、山岳競技会の目的・基本方針をはじめとして、競技会参加の資格から競技終了後の表彰式までの一連の事項を規定し、細部は別に細則で定めている。

三、山岳競技全種目についての共通規則。

基準要項が競技会の組織・運営に関するものとすると、この規則は、競技そのものの組織、運営についての種目、（縦走登山、登　、踏査登山の三種目）に共通する事項をまとめたものである。

例えば、競技規則の適用範囲競技会の分類・種目・方法などから、審査結果の判定・成績の公表・判定に対する抗議のしかたなどである。

縦走登山競技

三、縦走登山競技規則について。

㈠縦走登山競技については、次のように定義している。

縦走登山競技は、競技者が規定の装備重量で練磨された体力、すぐれた登山技術、総合的な登山知識、適切な判断力、チームの協調性などを展開する種目である。

㈡競技場は、尾根、山頂、鞍部などを含み、無雪期縦走登山の総合的能力を審査できるように設定されなければならない。

㈢競技はチーム単位とし規定のコースを行動し、その総合的能力を競うものである。

㈣審査は、別に定める項目についておこない、その判定は日山協公認審判員がおこなう。

㈤審査の結果は、種目別得点及び総合得点で公表され、得点順に順位が決定される。

四、登　競技規則について

定義㈠登　競技は、競技者が規定の用具でコースのとり方、用具の扱い方、登降技術などを展開する種目である。

㈡競技場は、連続登　コースは、平均傾斜度三〇度、隔時登　コースは高度差二〇メートル前後で、コースの最高

審査項目と採点基準表（表1）

項目番号	項目（点数）	細目（点数）		付与点	採点要素 主観	採点要素 客観	着眼点	方法 全区	方法 特区	方法 項	方法 グループ	加減点
1	体力（20）	基礎体力(10)		7	1		余裕	○				+3～−2
					1		疲労度	○				−1～−2
					1		担荷力	○				−1～−3
		体力調選(10)		7		1	先頭の歩速で歩く	○				+1～−2
						1	耐久力	○				+2～−3
						1	訓練度	○				−1～−2
2	技術（30）	歩行	基本姿勢(10)	8		1	歩行姿勢	○				−1～−6
						1	悪場の通過		○			+2～−2
			バランス(10)	7		1	リズム	○				+3～−3
						1	スリップ	○				−1～−2
						1	ツマヅキ	○				−1～−2
		生活	幕営(5)	3		1	張る順序		○			+1～−2
						1	〃 早さ		○			+1～−1
			用具の扱い(5)	3		1	コンロの扱い		○			+2～−2
						1	炊事		○			−1
3	装備（20）	服装(5)		3		1	靴ひも等の端末処理	○				+1～−2
						1	破れ・ボタン落など	○				+1～−1
		装備(15)		10		1	ザックの処理	○				+2～−4
						1	雨具		○			−1～−2
						1	手袋・スパッツの活用		○			+1～−1
						1	水筒・砥石		○			−1
						1	装備全般		○			+2～−2
4	観察研究（20）	研究	事前研究(5)	3		1	計画書の内容		○			+1～−2
						1	会場地の知識		○			+1～−1
			知識(5) ペーパーテスト	2		1	天気図		○			+1～−1
						1	地図		○			−1
						1	登山一般	○				+1～+2
		観察	観察(5)	2		1	観天気		○			+2～−1
						1	行動中の観察力		○			+1
						1	記録		○			−1
			判断(5)	2		1	天気図による判断力		○			+1～−1
						1	地図　〃		○			−1
						1	登山行動中の　〃		○			+1～+2
5	態度（10）	メンバーシップ(5)		3	1		マナー	○				−1
						1	自然保護	○				+2～−2
		チームワーク(5)		3	1		協調性	○				+1～−2
						1	指導性	○				+1～−1

傾斜度六〇度以内、懸垂下降コースは高度差十五メートル前後でコースの平均傾斜度六〇度以上、八〇度以内、いずれも岩質が安定している安全な岩場でなければならない。

㈢競技はチーム単位として規定の用具を使い、規定のコースを登降してその技術及び早を競うものである。

五、踏査登山競技について

㈠定義、踏査登山技術は、競技者が規定の地図に示されている確認定点を選んで自主的に行動し、目的地までの全コースとその周辺の事物、景観を観察、報告し、その正確さと目的地までの早さを展開する種目である。

㈡競技場は、確認点が十五以上あつてコースが三つ以上とれること。確認定点十ケ所を経由するコースで目的地までの距離が八キロメートル〜十キロメートルなければならない。また、競技者がコースをまちがえても危険がないこと、観察の対象になるものが十分なくてはならない。

㈢競技はチーム単位として、配布された国土地理院発行の二万五千分の一の地形図を基礎にして、磁石、筆記具だけを使つて、規定の確認定点を選んで登降し、その読図力、判断力、観察力及び目的地までの早さを競うものである。

以上競技のあらましについて簡単に記してみたが、その他、山岳競技施設認定規則、競技審判員規定……と枚挙にいとまないため、県山協の山岳競技についての説明会で詳細に補足したい。また、山岳競技が名実ともに競技スポーツとなるためには、競技の厳正、公平なる審査が不可欠の条件である。すでに確立されている日山協の指導員制度を土台にして、審判員の認定制度を設定し、競技審判員の資質の向上をはかろうとするものである。したがつて、審判員についても県山協の指導員会で研修会等で徹底を計りたい。

以上、山岳競技について概略を一通り記したが言いたりないところが少くない。来年度の国体山岳競技県予選会の方法も、日山協の国体山岳競技規則にのつとつて行なわなければならない。加盟団体の各山岳会の指導者、指導員の皆様から絶大なご協力をお願いしなければならない。

（〃国体山岳協議について〃日山協の龍島団体担当理事より一部抜粋）　藤井　信

登　挙　競　技

審査項目と採点基準表（表2）

項目番号	項目（点数）	細目（点数）	付与点	採点要素 主観	採点要素 客観	着眼点	方法 全	方法 担	加減点
1	体力（20）	基礎体力（10）	8	1		行動の余裕	○		＋2〜−4
				1		疲労度	○		−1〜−4
		訓練度（10）	8	1		脚力	○		＋1〜−4
				1		握力	○		＋1〜−4
2	技術（70）	用具の扱い方（15）	10		1	ザイルの結び方		○	＋3〜−6
					1	ザイルのまとめ方		○	＋1〜−1
					1	用具の扱い方		○	＋1〜−1
		隔時登挙（21）	15		1	確保のし方		○	＋1〜−3
					1	姿勢・バランス		○	＋2〜−4
					1	カラビナの扱い方		○	−1〜−2
					1	ザイルの扱い方		○	＋1〜−3
					1	ルートのとり方		○	＋1〜−3
		連続登挙（10）	7		1	姿勢		○	＋1〜−3
					1	ザイルの扱い方		○	＋1〜−2
					1	歩行技術		○	＋1〜−2
		懸垂下降（15）	10		1	姿勢		○	＋1〜−3
					1	足場のとり方・下降法		○	＋3〜−5
					1	ザイルの扱い方		○	＋1〜−2
		所要時間（10）	8		+1	第1グループ		○	＋1
					0	第2グループ		○	0
					−1	第3グループ		○	−1
3	装備（10）	服装（5）	3		1	身仕度	○		＋1〜−2
					1	靴ひもなどの端末処理	○		＋1〜−1
		装備（5）	3		1	ザックの処理	○		−1
					1	ゼルブスト・手袋	○		＋2〜−2

踏査登山競技

審査項目と採点基準表（表3）

項目番号	項目（点数）	細目（点数）	付与点	採点要素 主観	採点要素 客観	着眼点	方法 行	方法 報
1	行動（20）	コースの取り方(10)	6		2	確認定点の数		○
					2	〃 順序		○
		態度(10)	8	1		マナー	○	
					1	自然保護	○	
2	観察（60）	コースの状況(20)	10		5	概要説明		○
					5	特徴		○
		事物の確認(10)	6		4	三角点・水準点・建造物など		○
		自然現象(10)	6		4	植物・鉱物の状態・知識		○
		天然現象(10)	6		4	雲・風・気温・天候など		○
		景観(10)	6		4	山岳・地形		○
3	所要時間（20）	種別ごとに5グループに分（20）けて配点する	10		+10	第1グループ		
					8	第2 〃		
					6	第3 〃		
					4	第4 〃		
					2	第5 〃		

ていることを考慮して、本予選会も、日山協の具体的試案を出来得る限り取入れて実施することとし、五月に長野県で開かれた日山協の公認審判員に関する会議に出席された長岡H・Cの藤井信氏の助言を得て採点基準表を作成して実施した。

閉会式の後、関川村公民館会議室にて選考委員会が開かれ、慎重に審査の結果、成年の部男子三名、少年男子三名が県代表選手の候補者として選考され、後日、理事会の承認を得て次の選手が決定した。

選手（成年男子）

○石山　政雄(27)　中条山の会
　中条町水沢化学勤務

○佐久間雅義(27)　下越山岳会
　新潟市北越製紙勤務

○渡辺　忠次(27)　関川山の会
　関川村診療所勤務

選手（少年男子）

少年男子は、関東地区予選を通過しなければ佐賀国体への出場権は得られない。

○天木　安雄(18)　中条工業高校三年生

○飯原　俊之(18)　新潟工業高校三年生

○渡辺武由記(17)　新発田高校三年生

（監督　五十嵐　力）(40才)

第31回国民体育大会山岳競技少年男子関東地区予選会報告

新潟県チーム監督　五十嵐　力

本年始めて開かれることになった。山岳競技少年の部の地区予選会で、本県の所属する関東ブロック十一県の地区予選会が、八月十四日、十五日、栃木県宇都宮市の古賀志山系で行われ、本県、少年男子チームも予選会に参加し、第三位の成績で予選を通過しました。大会の所感を兼ねてここに報告致します。

山岳競技が天皇杯への移行に供つて競技規定が検討されその具体案をもつて始めて実施されたのが、本予選会で、当日日体協の担当者二名が視察参加した。

第31回国体山岳競技新潟県予選会

昭和51年度、佐賀国体山岳競技に派遣する選手選考の県予選会が、5月3日～5日、2泊3日の日程で、飯豊連峰において、選手役員百十数名が参加して開かれた。

予選会場の決定に当つては一部が山形県に属すること等もあつて諸々の心配もあつたが、室賀会長以下、諸先輩各位のご理解と、関川村山の会の全面的な協力を得ることで往復コースに決定した。

の新芽と豊富な残雪の温身平をベースとして、豪快な雪溪コースを北股岳まで往復し、一名の落伍者もなく無事予選会の幕を閉じた。

選手選考の審査基準に関しては、国体山岳競技が、得点種目への移行に殆動しはじめ

競技は、踏査競技と縦走競技とに分類されて実施されたが、詳細な方法論は別の機会に致しまして、基本的方法と採点項目及着眼点を記します。審判員については、各県より各々一名の派遣があり、本県からは長岡H・C・の徳長正氏が審判員として参加された。

踏査競技

基本内容

一　行動　確認定点の数十個所設置、一個所当り二・五点にて全踏査により二十五点採点。

二　観察　確認点に適宜五問の観察項目にふさわしい問題を提出専用々紙に解答願う。一問毎に五点とし二十五点採点。

三　時間　踏査所要時間を計り、一位五十点、二位四十八点と到着タイム順位順に二点減点方法で採点とする。

以上の満点を百分の二十に圧縮採点、縦走登山競技採点八十点と合計して得点を決め、他に研究、天気図、計画表、行動記録の提出、主観点を総合して審判長から成績順位発表が行われる。これが今回の審査項目と採点基準の特色でした。

項目		付与点	着眼点	パーテー番号 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
体力(30)	基礎体力	21	トレーニング度合	
	担荷力		ザック扱・血行保護	
	耐久力		疲労度合・注意力	
	体力調整		食物摂取・行動食	
	訓練度		休けい・習度・記録	
歩行(10)	基本姿勢	7	靴底のフラット着地	
	バランス		無理な姿勢	
	リズム		歩調	
	ルートハンディング		浮石・水溜り・ルート	
	悪場の通過		後続者に声をかけるか・相互指示	
マナー(10)	チーム	7	私物の管理	
	個人		行動中の私語・他人に迷惑	
	自然愛護		ゴミの処理	
チワーム(10)	リーダーシップ	7	チーム掌握・指示適切	
	メンバーシップ		共同器材分担内容認知	
			荷重を知っているか・指示応返	
生活技術(10)	天幕の取扱	7	季節・山系に合った形式・材質	
	コジロの取扱		スペース　張り方	
	食料炊事		コンロ整備・ノメル修理具	
	天幕の整理		食料の是否・予備食	
	照明		炊事法・天幕内の整理	
服装々備(10)	服装	7	ファスナー・ボタン締め	
	雨具		靴の手入・ひもの結び方	
	ザック		雨具の着脱収納	
	パッキング		ザックの型と大小・装備・不足	
	緊急時対策		荷詰・ラジオ・天気図	
合計(80)		56		
主観点			(5点法)	

付与点は可、不可のない標準（七十％）点です。これに三十％の加減点を付ける方法で、体力の場合、九点のプラスは極めて良いの頂点で中間の六点、三点等は、大変良い、良いで、マイナスの場合も同様に考える。歩行以下の項目はやはり、プラス、マイナス共、三点が最高です。

主観点は

五　非常にすぐれる。

四　すぐれている。

三　普通。

二　やゝ劣る。

一　劣っている。

以下成績順位（七位迄が佐賀国体出場権獲得）

一位　栃木県・二位　長野県
三位　新潟県・四位　群馬県
五位　千葉県・六位　静岡県
七位　東京都・八位　茨木県
九位　山梨県・十位　埼玉県
十一位　神奈川県（棄権）

この予選会を通じての所感、大会で最も重視されたのは何と云っても〝体力〟であろう。二十kg以上の重量、（特色）で、ハイピッチの登行、上下の変則コースは、まだ完成されない高校生にとつてはかなりきつかったようだ。体力的にというよりも、緊張から来る疲労がめだった。

踏査競技については、地図を読むこと、地形、地物を理解するには良い勉強になる。内容そのものより、J・O・C協会との摩擦が心配である。

日程　八月十四日（土）

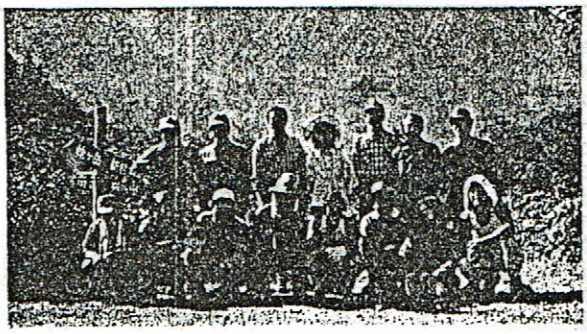
受付　開会式　十二時
踏査競技　十三時三十分
設営炊飯　十七時三十分
競技終了　十八時三十分

八月十五日（日）

競技開始　六時三十分
天幕撤収　パッキング
（重量測定　二十kg）
縦走競技　七時三十分
閉会式　十四時三十分
解散

なかまの顔

分水山岳会 構成と組織



創立　昭和21年　会員20名
会　長　山田　一男
副会長　長沢　洋輔
庶務会計　堀内捨己

特徴と方針

戦後早々地蔵堂山岳会として会費を徴収せず同好者が集まって山行をもつておりましたが、昭和29年より会費制にして更に昭和42年に分水山岳会と改称しました。会是に「山における最もいやな、つらい苦しい困難なしかも損なことを、真ッ先にほゝえみを以つてせよ」とあつたことを覚えているが、いうは易く行い難しでみんなどこ吹く風のように、苦しいことはさけて通つている昨今です。しかし乍ら人と人との結びつきを大切にせめて人に迷惑をかけぬ、公徳登山の道徳高揚だけは忘れぬように留意しております。これからは山の本をウンと読み、知性を兼ねそなえた岳人として、山を学び勉強することを目標にしております。

会報とバッチ

隔月報「分水嶺」93号　会報「ビブラム」第5号は本年末を予定しております。

会員募集

町だよりは勿論、体協ニュースや山岳会主催の町民登山（六月）公民館の町民ハイキング（十月）体協のオリエンテーリング（九月）等の主管事業の折にPRしています。

地域研究

各会員希望の地域や山塊の気象、地質、動植物などの自然科学や民俗、宗教その他史跡などの郷土史の研究発表会を重ねております。

国上山の環境保全を重視し、整備、清掃など自然保護パトロールを奉仕的に続けています。隣接団体との友好を深め井の中の蛙にならず、県山協などの行事にも率先参加を念じております。

会費　年額三、〇〇〇円

長岡工業山岳部

年々加入部員の減少で、数年後にはクラブの存続が危ぶまれる状態です。

山行は行事参加以外では、定例山行が年八回位（主に上越線沿線）部員には山行回数より、三年間で山の恐ろしさ、厳しさを覚えてもらうことに努め、山を楽しむことは社会人になつてからにしてもらつています。

夏山合宿は、北アルプスを剣・立山地域、後立山地域、槍・穂高岳地域の三地域に分け、三年間交替で歩き回る事にしております。冬は例年スキー合宿を予定するのですが個々で滑る方が楽しいらしく実施の方はなかなか……。

春と秋、先輩が猛暑の中伐採して作った長工新道（東山連峰）の道刈りに出掛け、クラブの記念道とし、また市民からはハイキングコースとして活用してもらつてます。

登山道整備の苦労が、自然保護と言う登山の原点を教えるのに役立つているのは幸です。

山行後は規定用紙で記録の提出と、感想文を求め、記録は綴つて後輩の資料とし、感想文はまとまつたら文集にする計画でおります。

弥彦山

松明登山について

花井　磐

昭和五一年七月二五日は、恒例の弥彦山松明登山祭も、二三回目を数え、しかも日曜に当つたので、参加者参百名を超え、恂に盛会であつた。

この行事の始つたのは、昭和二九年七月十三日（当時は旧歴六月一四日）であつた。

この行事の由来は、弥彦神社当局より私に、日本の三大燈籠行事といわれる弥彦神社燈籠祭りも、終戦後の社会情勢で年々淋れて来たのでこの祭りの振興のため山岳会で弥彦山にちなんだ協賛行事を考えてくれぬかとのことであつたとき私の頭に浮んだのは、明治二十年代まで行なわれた弥彦山の雨乞行事であつた。

蒲原の平野に旱魃が続くと弥彦の百性は、弥須山頂の御廟の近くに仮小屋を建てて幾日でも「弥彦山の龍と　上山の龍とご相談なされて雨雨頼む」とホラ唄を吹きながら恂に粗朴な唄を歌いながら御の回りを廻り、願いが入れられ雨が一滴でも降ると仮小屋を焼き払い下山する。たまたま下山が夜になると松明を灯して降る。これを見た里の百性は高張提燈を手に中腹まで

迎えに行く。全山松明と提燈の灯の行列が続き荘観であつたと云う。

この第一四のことは「越後山岳」第四号に駄文を記せてある。

この行事が発展し、県下各山岳会の一大交歓会となり、更に中央著名山岳家を毎年講師に招聘して、今年で二三年間一年も欠けることなく、県下岳人達の一大セレモニーとして定着した。しかも越後一宮弥彦神社最大の祭礼、燈籠神事に欠くことの出来ない名物となつた。

この蔭子は、地元弥彦山岳会、県下各山岳会の献身と、弥彦神社、大祭協賛会の援助を忘れることは出来ない。

毎年山頂で地元責任者として挨拶に立つ私は、ここ二、三年常に「ここまで歴史を重ねて来たこの行事に意義と生命があるならば、後輩の方々にいつまでも続けて戴きたい」と希望する次第である。

弥彦山松明登山祭讃歌

花井　作詞

一、神山弥彦ぞ　越路の象徴
　二百万人　仰ぎて崇し
二、神意を慰めむ岳人集りて
　太古のままの　心を捧ぐ
三、満山火をもて輝して進む
　岳人三百　意気ぞ高し

昭和三十二年の第四回から、今日まで雪山讃歌のメロディーで参加者から愛唱されていることは、面映くも嬉しく思う。

夏山登山技術講習会

平田大元

例年のとおり、七月十～十一日、士樽山の家で一泊二日の日程で行なわれた。

参加者は八十六名で、ほゞ毎年同じぐらいの人数が定着した。これはあくまでも初心者を対象とした岩登りの講習会であるが、はじめた当初は、かなりのエキパートも参加して、そのもの足りなさに、論議がなされたこともあつた。しかし協会は、つねに「初心者のため」という基本をふまえて、今日まできている。今回は参加者自身が、その目的を充分に事前に理解して、受講していたので、スムーズに、効果をあげ得た。

前夜は、山の家で、打合せや、講議が行なわれたが、国体選手の初顔合せも、年中行事となり、今秋、佐賀県へゆく、石山政雄（中条）、佐久間雅義（下越）、渡辺忠次（関川）の三選手が元気に姿を見せ小屋の外で幕営した。

十一日朝小屋の前の広場で七班にわかれ、小松沢奥壁にむけて出発した。各班長のアシスタントには、それぞれ、有能な若いクライマーを配したので、実技指導は密度の濃いものとなつた。

小松沢の入口から、岩場までの一時間の遡行は、沢身のなかを、大きな転石をたどつてゆくもので、バランスの訓練には、適当なアプローチである。

岩壁の基部で、ロープ・ワークについての基本を実技してもらつた。結束、安全ベルト、ザイルシュリングの用法、ハーケンの力学的な効果、隔時登はんと確保の原理、など、岩やロープははじめてという初心者も多く熱心であつた。

つづいて、岩壁の中間テラスで、グループごとに、ロープをつかつての登はんや、けん垂下降、落下の衝　を実際に伝えての確保などの練習が行なわれた。

落下の衝　力（F）は、「F＝mVo／t」（m体重、Vo落下速度、t制動時間）で理論的には表わされる。式からもわかるように、このtを大きくすることによつて、Fは小さくなり、制動確保の存在意義があるのだが、このへんのところも理解されていれば、なおいつそう、よかつたもの、と思われる。

帰りは、右岸の段丘についている道をくだつて車道にでたが、この道は、このゲレンデに通う近道であるので、これからも覚えておいてもらいたい。

岩登りも登山技術のひとつという考え方に立つているこの講習会に、来年も、初心者がたくさん参加してもらうことを期待している。（協会理事）

あとがき

国体登山が山岳競技になつても、私たちの普通の登山活動にはあまり関係がないが、山岳競技も、登山の一形式であることで理解していただきそして、年に一回の県予選会も、予選会で県代表選手になつた人も、登山活動の中で変つた一登山形式を体験するのだと、予選会に積極的に参加していただきたい。

各山岳会も組織の活動も大切なことを認識していただき、選手を送りだす会としても、協会の国体山岳競技の説明会なり、山岳競技審判や指導員研修会には代表者を出席させていただきたい。　藤井　信